

〔誌上講演〕

広島を知ることとは未来を考えること
「記憶の博物館」の軌跡と課題

志賀 賢治

To know Hiroshima is to think about the future:
Trajectories and challenges of the “Museum of Memory”

Kenji SHIGA

広島大学原爆放射線医科学研究所 附属被ばく資料調査解析部客員教授

Visting professor, Division of Radiation Information Registry, Reserch Institute for Radiation Biology and
Medicine, Hiroshima University

ただいまご紹介いただきました、広島平和記念資料館前館長の志賀です。本日は、2019年に過去最大の展示リニューアルを行った広島平和記念資料館の歩みと今後の課題についてお話をさせていただきます。

まず、資料館の使命と軌跡、歩みについてです。

広島平和記念資料館、通称原爆資料館は、1945年の8月6日、原子爆弾が作り出したきのこ雲(写真1)の下で何が起きたのかということ、あらゆる国の人々に伝えることを使命として設立されました。

では、このきのこ雲の下で何が起きていたのでしょうか。



写真1 米軍機より撮影したきのこ雲
(撮影/米軍 提供/広島平和記念資料館)

写真2をご覧ください。爆心地を中心に周囲360度を撮影したものです。撮影者は、米軍戦略爆撃調査団です。戦略爆撃調査団は、米軍が行った爆撃の効果を調査する組織で、広島でも詳細、綿密な調査を行いました。撮影日時は、原爆投下から二ヶ月を経過した1945年10月。ご覧の通り焼け野原、まさに廃墟です。流石に死体は片付けられていますが、残っているのは石やコンクリート造りの建物のみ。(写真2)

ここで、読んでいただきたい詩があります。

コレガ人間ナノデス
原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨脹シ



写真2 爆心地から (撮影/米軍 提供/広島平和記念資料館)

男モ女モスベテツノ型ニカヘル
オオ ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「助ケテ下サイ」ト カ細イ 静カナ言葉
コレガ コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス
「原爆小景」(原民喜)より

『夏の花』という作品で知られた原民喜の詩です。

これも、きのこ雲の下で起きていたことです。

原爆は、大量の人命を奪い(続ける)だけではなく、人間らしい死すら奪っていったのです。

このような、あの日の出来事をお伝えするために、資料館は資料を集めてきました。現在、資料館の地下には4室の収蔵庫があり、10万点を超える資料が保管されています。様々な資料が材質別に分けられ、収蔵庫に収めてあります。収められた資料は、適度な温度・湿度・照明のもとに、大切に保管されています。

資料館が収蔵する資料は、次のようなものです。

- ① 被爆資料、遺品
- ② 記録写真
- ③ 被爆者が描いた原爆の絵
- ④ 米軍収集資料

①被爆資料、遺品

原爆の熱線を浴び溶けた瓦やガラス瓶、石などの、物理的な資料、被爆の痕跡を留める資料です。そして、遺族から寄贈された遺品です。それらは、いまだに寄贈が続いています。(写真3)

写真4は8月6日の夕刻、出産の際に使用された産婆さんの道具です。産婦も、産婆も、大火傷を負っての出産でした。無事に男の子が生まれますが、産婦は出産直後に絶命し、産婆も失神してしまったそうです。産婆さんのお産の記録も残されています。産婦の名前と、父親と、出産の日時が書かれています。

写真5は、熱線を浴びて亡くなった中学生が、



写真3 (提供/福島志津子)

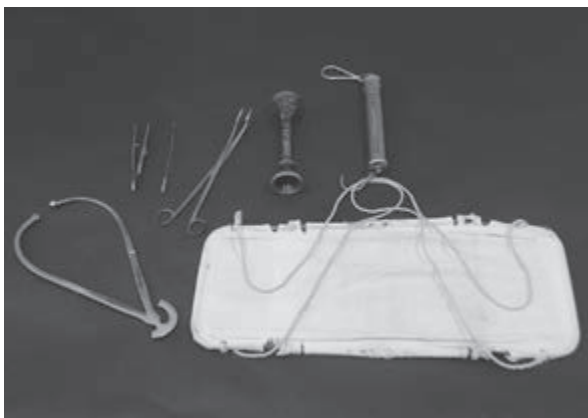


写真4 (寄贈/益田遙、東保都枝、益田紀志雄
所蔵/広島平和記念資料館)

お腹に抱きかかえていた弁当箱です。被爆から3日後に、母親が発見しました。

八月六日朝七時

米 麦 大豆の三種混合飯に

ジャガ芋千切りの油いため

こんな粗末な弁当を あ、うれし と

よるこんで持って出て よう食わずに

腹の下に抱きかかえたまゝ死んでいました

あゝ無惨

頭、顔の骨で見つけ出しました

母シゲコ 付記

弁当箱に添えられた母親のメモです。

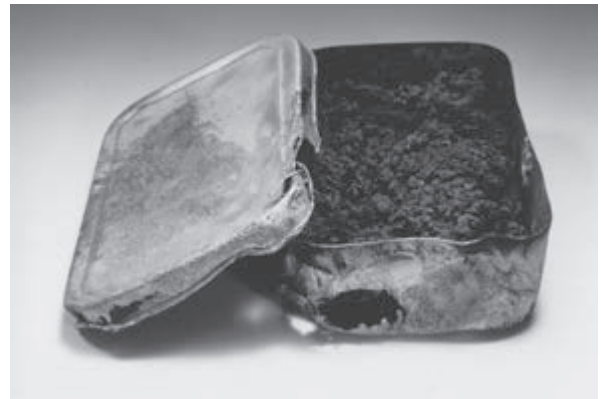


写真5 (寄贈/折免 シゲコ 所蔵/広島平和記念資料館)

これまでは、遺品にまつわる話を詳しく聞くことができたが、それはもう、期待できなくなりつつあります。

②記録写真

また、フィルムも含めて写真もたくさん保管しています。

写真6は被爆の翌日、8月7日に撮影されたものですが、漂っている煙が見えます。

中央に、かすかに原爆ドームが見えます。

写真7は、正面から撮影された広島赤十字病院です。

③被爆者が描いた原爆の絵

残されている写真は、被爆後に撮影されたものばかりで、当日撮影されたものは、わずかしかなかった。しかし、生き残った被爆者が、忘れようにも忘れることができない自らの記憶をもとに描き起こした絵を、資料館で5,000枚保管しています。



写真6 (撮影/岸田貢宜 提供：岸田哲平)



写真7 (撮影/川本俊雄 提供/川本祥雄)

その一部をご紹介します。
ここでご紹介するのは、母親と子供が描かれた絵です。(写真8)



写真8 (作/瀬川きくの 所蔵/広島平和記念資料館)

この絵は、被爆時37歳だった方が66歳でお描きになったものです。30年経っても、忘れようにも忘れることができない光景なのです。絵には、「お母ちゃんは死んでいるのよ」とタイトルがつけられています。

また、絵の中に文字が書かれているものが多いことが特徴です。絵にすることができなかった思いや、悔しさや、慚愧や、祈りや、無念さといった言葉が書かれています。

次の絵(写真9)には、子供を守ろうと覆いかぶさったまま、2人とも真っ黒焦げになった母子の姿が描かれています。余程強烈な印象を与えていたのか、多くの方がこの光景を絵にされています。

④米軍収集・保管資料

さらに、米軍が収集・保管していた資料も、米国から取り寄せて保管しています。



写真9 (作/谷本初登 所蔵/広島平和記念資料館)

米軍は様々な形で詳細な調査を行い、日本側の調査団から没収した資料も含めて膨大な資料を残しています。

とりわけ印象深いのは、当時まだ珍しかったカラーフィルムを使用しての写真や映像です。

市内各所の建物の破壊状況や熱線の被害状況を映像に収めていますが、人体への影響も映像として残されています。

日本赤十字広島病院で撮影された映像には、被爆し、上半身にケロイドを残した女性とその赤ん坊をはじめ、熱線によって無惨なケロイドを負った人たちが素肌を晒して次々と登場します。

そうした映像は、米国国立公文書館(NARA)のWebサイトからもダウンロードすることができますが、人体への影響に関する映像は、資料館では保管していますが一般公開はしていません。

次に被爆資料の収集についてお話をいたします。先ほどもお話ししましたが、被爆の翌日から被爆資料を集め始めた人物は、初代資料館長となる、長岡省吾です。当時、広島文理科大学の地質学鉱物学研究室の研究員だった彼は、6日当日は海軍の仕事で山口県に出張していましたが、翌日、大学の様子を見るために広島に戻ってきます。

広島市の西のはずれで列車を降り、大学を目指して歩き始めた彼は、凄惨な光景に次々と出会い、肉体的にも精神的にも疲れ果てます。そして、一休みしようと途中の神社にあった石の上に腰を下ろします。それは偶然にも、爆心地の目と鼻の先でした。しかし、腰を下ろした途端、彼は激痛を感じ、石を見ると表面が鋭く棘立っていました。そのとき、鉱物の専門家である彼は、石の表面が異常な高温で溶けていることに気がつきます。そして、石をも溶かし、凄惨な状況をもたらした原

因を探ろうと決意して、大学に向かいます。彼の目的地であった広島文理科大学の正面には、赤十字病院がありました。図1の濃く塗りつぶされた部分が、熱線によって焼き尽くされた爆心地を中心にして半径2キロメートルの区域です。この区域は、放射線の影響もととりわけ強かったようです。長岡氏は、この区域を横切って大学に辿り着きました。まさに爆心地を通って行ったということになります。

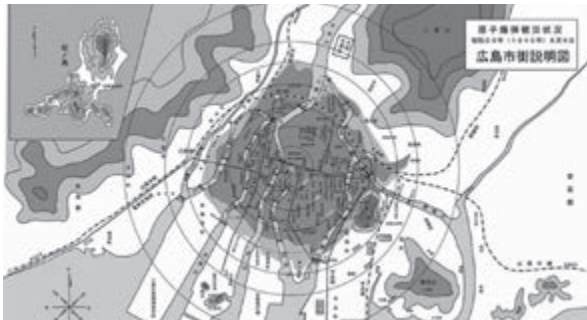


図1 原子爆弾被災状況（提供/広島平和記念資料館）

こうした彼の活動に着目した当時の広島市長が、被爆資料の保存によって被爆の記録を残そうと長岡氏に話を持ち掛け、平和記念資料館建設の運びとなります。当初は、公民館の1室を使い長机に資料を並べただけのささやかな展示でしたが、報道によると、それでもこのときから多くの見学者が訪れていたようです。1年後に、資料館の前身となる原爆記念館という小さな施設が、公民館に隣接して建築されました。1950年8月6日に開館していますが、この施設にも、大勢の見学者が押し寄せたそうです。

こうした活動の傍ら、彼は爆心地の特定に繋がる調査もします。

被爆後広島には多くの影が残されていました。原爆の熱線によるものです。その多くは花崗岩の表面に残されていました。墓石がそれです。彼は、六千基を超える墓石を調査し、墓石に残された影と、影をつくりだした物体を結び、熱線の方向と入射角を計測していきました。それは、次第に一点に集束していきます。それが、爆心地です。熱線が作り出した影は、道路のアスファルトや塗装されたガスタンクにもついていました。（写真10）

有名な影は、「人影の石」或いは「死の人影」と呼ばれる市中の銀行の正面玄関の石段に腰掛けていた人の影です。現在は、資料館に移設され展示されています。



写真10（撮影/米軍 提供/広島平和記念資料館）

1950年に着工された資料館は、資金難による3年間の工事中断を挟み、1955年8月24日、広島平和記念資料館としてようやく開館します。館長には、長岡氏が就任しました。開館当初の展示は、コンクリートの床の上に直接被爆資料を無造作に並べて展示してあるだけでしたが、それがかえって迫力があったという評価も残っています。しかし、資料の点数はまだ少なく、長岡館長は、少ない職員とともに、資料収集や調査活動に懸命に励んでいたそうです。

当初の資料の収集は、彼の専門であった岩石や溶けた瓦といったものでしたが、次第に、犠牲者の犠牲の痕跡を残した衣類などの遺品にも広がっていきました。科学的な探求心から始まった長岡氏の資料収集は、犠牲者の記憶を留めるということも意識し始めたようです。資料収集を手伝った人達は、資料を受け取る際に必ず犠牲者の名前を確認するように指示を受けていたそうです。

写真11は、爆心地から1.3キロメートルの場所で被爆し、半身がケロイドで覆われた木曾馬の調査に赴いた際のものです。現在は、資料館に剥製として保存されています。



写真11（収集/長岡省吾 提供/広島平和記念資料館）

時期が少し前後しますが、原爆に関して当時の日本の状況についてお話しておきます。

原爆投下直後、日本の軍部は原爆の報道を規制しました。むしろ、原爆は恐るるに足らず、ということを強調したのです。終戦まで、国内向けにはこの姿勢を貫きました。その後、日本に駐留した占領軍も、原爆報道を規制いたしました。プレスコードによる規制です。つまり、日本の国民は、原爆についてほとんど知ることがなかったということです。状況が変わるのは、いわゆるサンフランシスコ講和条約が締結された後です。この条約によって、日本は主権を取り戻します。つまり、独立した国家に戻り、先ほどのプレスコードによる報道規制から解放されたということです。その後、原爆に関する報道が始まります。最初の報道は、『アサヒグラフ』の1952年8月号です。日本の国民は、この雑誌に掲載された写真によって初めて被爆の実態を知ります。この雑誌はたいへん売れ、たくさん刷るために、多色刷りから2色刷りに切り替えて発行が続けられます。

もう一つは、資料館が開館する前年に起きたビキニ水爆被災事件です。はえ縄漁船の第五福龍丸が、操業中、ビキニ環礁で行なわれた水爆実験により死の灰を浴び、船員の一人が亡くなった事件です。このとき、長岡氏は、船が帰港した焼津港まで取材に行っています。この事件はたいへんな反響を呼び、核実験の反対運動が日本全国で巻き起こりました。

1955年に資料館が開館しますが、その1年後に資料館を会場とした博覧会が開催されました。『原子力平和利用博覧会』です。原子力の民生利用についての大規模な展示があり、特に人気だったものは、機械式アームのマジックハンドです。アームの先端で筆を掴み、平和や原子力と書いた入館者もいたそうです。原子力平和利用博覧会は日本全国で10会場開催されており、東京や大阪でも開催されました。広島会場には、約11万人が訪れたそうです。このとき、館内にあった被爆資料や遺品は撤去され、以前展示されていた公民館に移されます。広島会場の主催者は、広島県、広島市、広島大学、中国新聞、アメリカ文化センター(ACC)でした。

さらに、それから2年後の、1958年4月に入って、広島市内の数か所で『広島復興大博覧会』と

銘打った大規模な博覧会が開かれます。このとき、平和記念資料館は会場の一つとして選ばれますが、会場の名前は、原子力科学館という名称にされます。この会場の入り口では、先ほどの被爆した馬が来場客を迎えましたが、それがこの馬にとって最後の仕事になったそうです。

そして、原子力平和利用博覧会で人気を博したマジックハンドの実演も行われます。この博覧会以降、館内の展示は、被爆資料の展示と原子力の平和利用の展示、つまり、民生利用の展示が併存することになります。戦争で使うとこれほど悲惨な結果をもたらすものが、民生利用するとこれほど素晴らしい未来が開ける、というメッセージが出される展示になったというわけです。しかし、1967年になって、市民の間から疑問の声があがり、議論の結果、平和利用関係の展示は撤去されます。つまり、被爆の実態を伝える資料館になるわけです。ちょうどこの当時の館内風景を撮影した映像があります。アラン・レネ監督の、『ヒロシマモナムール』という、1959年に封切られた映画です。その一場面に当時の資料館の館内が映され、原子力飛行機の模型が映されます。広島を扱った映画としてたいへん有名で、ヨーロッパではこの映画で広島と出会ったという方が多いとのこと。皆さんも一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

次に、2019年に公開された新しい展示についてご紹介します。

今回の展示更新以前に、大規模な展示更新は2度行われています。直近のものは1991年に行われた第二次の大規模展示更新ですが、2016年まで公開されていましてのでご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。この展示で特に大きな話題となったのは、被爆して逃げ惑う人々を再現したジオラマ模型(写真12)です。実は、私が館長に就任した2013年春先、この人形をめぐって様々な議論が起きていました。

2019年4月25日に、開館以来最大の展示更新が完了し、全館の展示をオープンしました。まだご覧になっていない方のために、館内の様子をご紹介します。

資料館へは、向かって右側の東館から入館します。そして、渡り廊下を通して本館へ移動します。まず、本館に入る前に、1945年8月8日に、一体



写真12 (提供/広島平和記念資料館)

何が起きたのかを知って頂くために、東館の3階に「導入展示」を設けました。

この導入展示では、被爆前の広島の様、そして、その広島が一瞬にして壊滅し、どのように市街地が破壊されたのかを見ることができます。

3階でエスカレーターを降りると、壁一面に被爆前の中島地区の街並みのパノラマ写真（写真13）が広がります。目の前には、被爆前の原爆ドーム、当時は広島県産業奨励館、そして、街並みの右側には、投下目標となった独特のT字形をした相生橋が見渡せます。

壁を覆う写真は、路面電車が往来する繁華街、買物客で賑わう商店街、県立広島第二中学校の水泳大会、^{のぼりちょう}幟町尋常高等小学校の教室での集合写真へと順路に従って移り変わっていきます。いずれも、1930年代に撮影されたもので、このような写真は広島にはごくわずかしか残っていません。貴重な、まさに失われた風景です。

被爆前の広島を見ながら、「1945年8月6日8時15分」の壁を抜けると、荒涼とした被爆後の世界が広がります。

展示室の壁面は爆心地を中心に周囲360度を撮影した被爆後の市街地のパノラマ写真で覆われ、まるで廃墟の中に立っているかのようです。



写真13 (提供/広島平和記念資料館)

展示室中央には爆心地を中心に半径2.5キロメートルの被爆後の市街地地表面の模型に、米軍が撮影した被爆前後の空撮写真と爆発の瞬間を再現するハイビジョンCG映像が投影されています。映像では、投下された原子爆弾が、半径約2キロメートルの範囲を、火の海とし、街を焦土と化してしまう様子を映し出します。広島が廃墟となるのに10秒間も掛かっていないことが理解できるでしょう。

次は、渡り廊下を通過して、本館へ向かいます。

ここで、本館の展示コンセプトをご紹介します。

まず、被爆者の視点である日表現するという
ことです。

それから、実物資料によって表現するという
ことです。既に説明した資料館がたくさん持っているあの日広島にあった資料によって表現する
ということ。

そして、最後に、一人ひとりの犠牲者の無念、遺族の苦しみを伝えるということです。原爆、あるいは被爆のことが語られるとき数字の大きさで語られることが多い、つまり、威力の大きさで語られることが多いのです。表現を変えれば、都市が一つなくなってしまったということは、皆様ご存知でしたし、広島の上空に立ち昇るきのこ雲の写真もよくご存じでした。しかし、そのきのこ雲の下で何が起きていたのかは、あまりご存じなかったようです。資料館に来られて、初めて知ったという方は多くいらっしゃいます。そうした一人ひとりの被爆者の苦しみをお伝えするということ。

この三つが、本館の展示コンセプトです。

さて、本館のテーマは、二つ。「八月六日のヒロシマ」と「被爆者」です。

あの日、キノコ雲の下で一体何が起きたのか、
原爆は人々に何をもたらしたのか。

廊下を渡り始めた来館者は、その視線の先に焼け跡に立った一人の少女の写真(写真14)を目にします。白っぽいワンピースを着たオカッパ頭の少女です。右腕に包帯を巻いて、来館者をじっと見つめています。廊下を渡り終える辺りから、微笑んでいたように見えた少女は、実は苦悶の表情を浮かべていたことに気が付きます。

本館全体を通してのテーマである「人間的悲慘」を暗示する写真です。

左に折れて、本館に入っていくと、2枚の写真



写真14 (提供/広島平和記念資料館)

が目に入ってきます。2枚の写真に写っているのは熱線に襲われて大火傷を負い、命からがら逃げてきた人々です。撮影は、午前11時。被爆から3時間ほど経過しています。爆心地から約2.3キロメートル南の橋の上。

最初の写真には、黒焦げの赤ん坊を腕に抱えた女性の姿が写されています。

もう1枚の写真には、頭髮が焼け縮れ、腕からは自分の皮膚をぶら下げた半裸の女性の姿が映されています。数千度の熱線は人々の表皮を一瞬にして黒焦げにしていきました。引き剥がされた皮膚を体からぶら下げて人々は逃げ惑いました。

さんざんためらった挙句に切ったシャッターでしたが、この二枚の写真を最後にこのカメラマンは、凄惨な犠牲者の写真は撮影していません。

少し先に進むと、左手に見上げるように立ち昇るきのこ雲の3枚の写真があります。誰も見たことのない異様な雲でしたので、何か所かで撮影されています。気をつけて見ると、二枚目の写真の左下隅にはきのこ雲を呆然と見上げる人々が小さく写っています。雲の巨大さが分かって頂けるはずです。

少女の写真も、また、当日撮影された橋の上の人々の写真もそうですが、これらの写真はいずれも来館者の視線を意識した大きさ、配置になっています。等身大、あえて言えば臨場感を醸し出す

ことを意識しました。本館のもう一つの柱は、この「当事者感覚」です。きのこ雲も、更新前まで展示していた有名な米軍撮影の空からの写真(写真1)は取りやめ、地上から撮影された写真のみを使用しています。

燃えさかる市街地の写真を右側に見ながら歩を進めると、「都市の被害」のコーナーです。様々な大型の被爆資料と破壊された市街地の写真によって、都市にもたらされた破壊の大きさが表現されています。

爆風によって大きく折れ曲がったビルの鉄骨や被服支廠の鉄扉、数千度の熱線によって変色した墓石や灯籠、あらゆるものが溶けて固まった異様な形の溶融塊。そうした被爆資料とその背景に展示された廃墟となった市街地の写真。

そして、展示室中央の大型ガラスケースの中には、あの瞬間、防火帯を作るために建物を壊す建物疎開作業に従事していた中学生たちの残した衣類が十数点、瓦礫の上に横たわったかのような状態で展示されています。いずれも熱線に襲われた跡が窺えるものです。(写真15)

これらの遺品を見ながら展示ケースを廻ると、熱線による大火傷で亡くなった犠牲者の写真とともに、生き残った被爆者が、後に、忘れようにも忘れられない記憶を自ら絵筆を執って描き残した「原爆の絵」が展示されています。

次に、「人影の石」の前を^{くすぶ}って、「黒い雨」、3日後も燻っていたともいわれる「高熱火災」の各展示へと向かいます。

「人影の石」は、爆心地から東260メートルの地点にあった旧住友銀行広島支店正面玄関の石段です。石段に腰を掛けていた人の影だと言われていましたが、実際は熱線による周りの石の白色化と有機物の固着によって影と見えていたようです。

原爆炸裂後、しばらくして「黒い雨」が降り始めます。真っ黒い粘つく雨だったと言われていいます。記録では、かなり広い範囲に降ったようです。



写真15 (提供/広島平和記念資料館)

もちろん、沢山の放射性物質を含んでいましたので、池の魚が死んで浮き上がったそうです。展示してある壁や衣類に残った黒い跡からも、わずかですが、放射性降下物が検出されました。

強烈な熱線により、爆心直下や市内中心部の木造家屋や電柱が自然発火しました。続いて市内のいたるところで倒壊した家屋で使われていた火気などを原因とする火事が発生し、終日、街中が燃え続け市街地を焼き尽くしました。爆風で倒れた建物の下敷きとなって動くことができない数多くの人々が、生きながら焼かれて亡くなりました。

次のコーナーは、被爆直後から行なわれた救援救護についての展示です。あらゆる都市機能が壊滅状態の中での救援・救護活動は困難を極めました。しかし、何よりも世界で初めて人々の頭上で炸裂した原子爆弾。一体何が起きたのか理解できず、放射線による急性障害を伝染病と判断された被爆者もいたようです。そして、救援のために入市した人の中からも放射線の影響で亡くなる人が出てきました。

病院は破壊され、河原や橋のたもとなど負傷者が集まる場所、あるいは焼け残った学校や銀行などの建物が臨時的救護所となりました。救護所に配られた医薬品や物資はわずかしがなく、ベッドや布団もありませんでした。負傷者は十分な治療を受けられないまま、ムシロや畳を敷いた床の上に横たわっていました。

爆心地から710メートルの地点の百貨店内の写真が展示してあります。被爆直後一週間の間に撮影されたものです。内部は全焼しましたが、建物の外郭は残ったため、救護所となり、数多くの負傷者を収容しました。写真には、床に敷かれたムシロの上に横たわっている人々が撮影されています。被爆者の中に血便が出る人が増加したため、当初は赤痢と診断され、伝染病病院とされました。

被爆直後から短期間に現れた放射線による一連の症状の中で、最も知られた症状に、頭髮の脱毛があります。

放射線による被害のコーナーには、9歳の姉と7歳の弟の写真が展示されています。二人は並んで、^{うつろ}虚な表情でこちらを向いています。特段変わったところは見えません。二人とも頭髮が全て抜け落ちていること以外には、屋内での被爆から数日後、二人の頭髮が抜け始め、姉は歯ぐきからの出血や発熱などを起こしました。二人はいったん回復しましたが、弟は被爆から4年後11歳で亡くな

りました。姉は結婚し男の子を授かりましたが、20年後、がんで亡くなりました。29歳でした。

これで、「八月六日のヒロシマ」は、終わります。

その後、展示は、もう一つのテーマである「被爆者」に移ります。

この展示室では、様々な遺品が来館者を迎えます。遺品だけではなく、遺影も添えてあります。それぞれの遺品には、遺族から聞き取った本人の言葉や手記を基にしたキャプションが添えられています。

黒焦げの弁当箱、錆び付いた三輪車、三人の中学生の残した衣類をまとった籐人形。いずれも生前の姿を彷彿とさせるべく工夫を凝らした展示をしています。

ここでも、原爆が広島から何を奪っていったのか、について思いを馳せていただけるかもしれません。そしてあの瞬間まで、一人ひとりの暮らしがあったこと、それぞれの遺品に、犠牲者の苦しみや遺族の悲しみ、さまざまな思いが託されていることを、そして、無言の問い掛けを感じとって頂けることでしょう。これらの遺品は、一つひとつ個別のケースで展示されていますが、次のコーナーでは、壁面に設置された大型展示ケースに、亡くなった人が身に着けていた衣服が十数名分並べて展示されています。来館者に向けて展示板は斜めに傾斜し、衣服はその展示板の上に広げられています。持ち主の生前の姿を想起できるように工夫が凝らされているのです。

壁面大型ケースに続いて、空襲を避けて郊外に疎開中の子どもたちにあてた家族からの手紙や遺書、被爆後に書かれた日記などが展示されています。

そして、先ほども触れた原爆の絵。被爆者がお描きになった絵の「原画」が展示されています。保存の関係で密閉されたガラスケースの中での展示となっていますが、慣れない絵筆を執って、何十年たっても頭から離れなかった凄惨な光景を、懸命に、ひたむきに描かれたことは十分感じ取っていただけることでしょう。克明に描かれた絵そのものにも胸をえぐられますが、絵には、絵筆では表現しきれなかった作者の「思い」が文字によって綴られています。悲しみ、慟哭、慚愧、後悔、祈り等々。

現在、資料館では、5,000枚の絵を保管していますが、絵具の褪色も激しいため保存対策として、長期間の展示を避けて一定期間毎に絵を入れ替え

ます。

主要作品は、『図録 原爆の絵』（岩波書店発行）で見ることができます。

次は、朝鮮、台湾や中国大陸からの人々など日本人以外の被爆者についての展示です。（写真16）当時日本の植民地下にあったこれらの人々の中には徴兵や徴用されていた人々もありました。また、東南アジアからの南方特別留学生やドイツ人神父、ロシア人家族、米軍捕虜なども原爆の犠牲となりました。



写真16 （提供/広島平和記念資料館）

そして、大勢の日系米国人も犠牲となっています。広島県は、全国一の移民送出県で、多くの二世、三世がハワイや米国本土から日本の文化を学ぶため広島に帰ってきていました。しかし、戦争勃発後広島に留まらざるを得ず、8月6日を迎えることになった訳です。

このコーナーには、捕虜になった米国兵が残した認識票や朝鮮での徴兵実施により広島の部隊に配属され被爆した方の軍隊手帳・罹災証明書・除隊証明書のレプリカが展示されています。

本館の展示は、辛うじて生き残ったものの、あの日の記憶を心身に残して生きてきた被爆者、原爆小頭症患者の様々な苦しまの物語で終わります。

本館の展示の出口は、細い通路となっていますが、通路の右側の壁全面に、^{うずたか}堆く積まれた頭蓋骨の写真が展示してあります。被爆7年後に発見された遺骨です。この遺骨が見つかった町は広島から10キロメートル近く離れていますが、被爆直後から救護所が開設され、数多くの負傷者が収容されました。

通路の左側の壁面には、5枚の人物写真があります。被爆の記憶を引きずりながら、悲しみや苦しみ、不安や絶望を心に抱えながら人生を歩ん

できた人々を、写真で紹介しています。

そして、来館者は、通路の正面に、あの日から一年後に誕生した女の子と彼女を抱く満面の笑みをたたえた母親の写真を見ながら本館を後にします。この母親は、あの日、一歳の長男と共に市内電車の中で被爆します。その後、20日ほど経って男の子は亡くなります。一命をなんとかとりとめた母親に授かった命がこの女の子でした。（写真17）

来館者は、この後、本館を折り返し、公園を望む明るい空間へと導かれ、東館へ向かいます。（写真18）

この空間の東館側の端に、「対話ノート（Dialogue Note）」と名付けられた大学ノートを置いた記載台が2基置いてあります。ノートには、来館者は自由に書き込むことができます。また、既に記載してある記述を見ることも可能です。

対話ノートに感想を記載した後、来館者は、本館の入り口で出会った少女のその後の人生を知るようになります。

さて、東館です。東館の最初の展示には、「核兵器の危険性」というタイトルが付けられています。

ここでは、核分裂の発見と、核兵器の開発の歴



写真17 （提供/広島平和記念資料館）



写真18

史と、広島への投下の経緯と、核爆発の仕組みと、人体への影響という、そういった学術的な情報の提供を行っています。さらに、展示の後半では、核実験が地球環境に及ぼした影響や、核拡散の現状や、近年の核廃絶の動きについても記述しています。

各展示のタイトルは、日本語と、英語と、簡体字と、ハングルの、計4つの言語で表記しています。しかし、それぞれの展示への説明は日英の2か国語が限度ですから、各コーナーに16か国語で展示を説明した、タッチパネル式の装置を用意しています。これは本館の展示でも同様です。

さらにより詳しい情報を検索するためにタッチパネル式の端末を用意しています。(写真19) 来館者は、この端末を自分で自由に操作して、壁面の展示よりさらに詳しい情報を得ることができます。全部で20機用意してありますが、コロナ禍のおかげで、直接触っていただくことに非常に神経を使っておりますので、現在は少し不自由かもしれません。



写真19 (提供/広島平和記念資料館)

次のコーナーでは広島史を扱っています。近代日本、広島史の発展、さらには戦争への歩みといった歴史の展示です。被爆後の広島史の再生の道のりも展示しています。ここでも同じように、タッチパネル式の検索端末を用意しています。壁面の上部には、広島史の再生を撮り続けた写真家の作品のライドショーを投影しています。

これで資料館の常設展示は終わります。

この展示ですが、この展示は、被爆者の見ることのできる最後の展示になるのではないかと私は考えています。ですから、これまで以上に展示の精度を上げようと努力してきたつもりです。そのように考え始めて以降、次第に、資料館の運営に

についても考えるようになっていきました。開館以来、今まで60年間、資料館は被爆の当事者による運営やサポートによって成り立ってきたといっても過言ではないでしょう。現に、歴代館長の多くは被爆者でした。また、世間、特にメディアの皆様は、そんな当事者性を資料館に求められているのかと思います。しかし、そうした当事者によるサポートに頼ることができなくなる日は、間もなくやってまいります。

資料の劣化

次のテーマは、資料館が直面する課題です。資料館の最大の課題は、何と言っても、資料の劣化です。ちょうど被爆から70年の2015年8月6日に、職員全員で展示室の展示ケースを開けて、遺品や資料の一斉清掃を行っていましたところ、8時15分を指したまま止まってしまった懐中時計の、8時を指した短針が、腐食のために折れていることが発見され、改めて、資料の劣化の深刻さを認識することになりました。以後は、それ以前に増して、劣化対策が強化されました。レプリカの制作点数も増やされたわけです。先ほどお話しした原爆の絵も、劣化が進んできています。そもそも、この原爆の絵というものは、新聞の折り込み広告の裏や孫のスケッチブックなど、粗末な画材を使って描かれたものが多いため、劣化は非常に深刻です。

もうひとつ、先ほどは資料館が当事者性を失ったときのことを申し上げましたけれども、被爆の当事者の不在ということは、広島市にとっても大変大きな意味があるのではないかとこのことを思い始めています。それこそが広島史の課題であると言えるかもしれません。広島という地域の、最も大きな課題ではないかと思うようになってきました。その時代が間もなくやってくるわけですが、我々にできることは何なのかを考えていきたいと思っています。

最後に、そういった資料館のこれからについて、少し考えてみたいと思います。

資料館は、展示の更新作業と並行して、2017年からは、内外の博物館とのネットワーク作りを模索していました。すでに長崎原爆資料館やひめゆり平和祈念資料館など国内のいわゆる平和博物館との交流はありましたが、それまで原爆展以外では機会がなかった国外の博物館との交流にも取り

組み始めたのです。

海外での原爆展での渡航の機会を利用して、ポーランドのアウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館やチェコのリディチェ記念館、パリのショア記念館といった負の歴史の記憶を繋ぐ博物館、また、広島から被爆資料を貸し出している博物館を訪れ、先方の館長たちと意見交換を重ねてきました。

そこから見てきたことは、資料の劣化と記憶の風化との戦いは、どこも同様で、壊れたもの、汚れたものをそのままの形で保存し続けることの難しさと、そして、次世代に伝えていくことの困難さでした。

そうした中で、2018年11月、ベルギー・イーペル市のイーペル博物館で原爆展を開催しました。第一次世界大戦終戦100年目にあたることもあって、資料館からの呼びかけにイーペル市が応えたものです。休戦記念日の11日を前に9日夕方に行なわれた原爆展の開会式に出席しました。

イーペル市では、1927年に建てられたメニンの門という巨大なアーチ（写真22）の中で毎晩午後8時から「最後の歩哨」（Last Post）という儀式（写真23）が行なわれています。このアーチには、1917年8月15日までにこの地域で行方不明になった大英帝国に属する諸国の兵士、5万4千人の名



写真22 （提供/広島平和記念資料館）



写真23 （提供/広島平和記念資料館）

前が刻まれています。この儀式は、1929年以来毎晩8時に行なわれ、ドイツ占領時代に英国国内で行なわれた時期を含めて、今までに3万回以上も実施されてきたことになります。（『大戦の中の詩人の死』『図書』2017年12月号）

その後、スペインのゲルニカ平和博物館に向かいました。さらに、資料館から貸し出された被爆資料が、世界大戦を象徴する出来事としてアウシュビッツの資料と並べて展示室（1914-1945）の入り口に置かれているドイツ・ドレスデンのドイツ連邦軍軍事史博物館を訪問しました。

既に皆さんお気づきかもしれませんが、私は大量殺戮を経験した都市とその記憶を留める博物館を歴訪したわけです。イーペル市には毒ガス、イペリット・ガスが、ゲルニカ市には焼夷弾が史上初めて本格使用され、ドレスデンはドイツ降伏目前にしての徹底した大空襲でした。

どの都市も、ひなびた小さな街で、なぜこんな街に大量の科学技術兵器が投入されたのか首を傾げた次第です。そして、広島に帰って気がつくのですが、結果的に、無差別大量殺戮の歴史を、科学技術兵器の発達の歴史を辿っていたのです。「ゲルニカ」と「ドレスデン」の間に「重慶」を、そして、最後に「東京」と「広島」を加えれば、発達史はほぼ完成します。

広島は、空からの効率的な無差別大量殺戮、科学技術の戦争への応用、その両方の「集大成」だったわけです。ですから、どの都市の博物館も、自分たちの味わった惨劇の行く末、到達点として「広島」を見ていたことに気づいたのです。

広島がこのように見られているとすれば、広島は、それぞれの都市の殺戮の記憶を繋ぐ博物館、いや、都市の「ハブ」の役割を果たすことができるのではないかと考えるようになりました。

最後に、今まで資料館のあり方について考えてきましたけれども、もう1つお話しておきたいと思います。今までの展示というものは、どちらかというと、原爆が広島にもたらした悲惨な結果を前面に押し出していました。先ほどご覧いただいた被爆再現人形は、いい例だと思います。しかし、そういった展示をずっと考えて、新しい展示を考えていく過程で気がついたことは、本当に大切なのは、広島が失ったものではないかということです。原爆が広島から奪い去ったものが、最も大切なのではないかと考えたのです。原爆がもたらしたもののから、原爆が奪い去ったもの、というふうに発想の転換をしていったと言ってもいいかもしれません。この写真（写真20）をご覧ください。6人家族のお父さんがずっと撮影し続けた写真で、アルバムの中の1枚です。



写真20（提供/鈴木恒昭）

実はこの写真は、郊外にあったもので、熱線も放射線も全く浴びていません。家族の家は爆心直下にあり、何もかも焼き尽くされ、家族は一人残らず亡くなりました。この消えた家族を記憶するものは、郊外に疎開していて助かったこのアルバムだけです。このように、資料館がお預かりしている犠牲者の遺品の中には、熱線も放射線も浴びていない、字義通りには被爆資料とは呼べないものも、多くございます。皆さん8月6日にお亡くなりになりました。（写真21）いまや資料館は、原爆がもたらしたもののや、そういった惨劇を伝えるだけではなく、原爆が広島から奪い去っていった日常や死者など、広島が失った記憶を伝えていくようになってきていると言ってもいいかもしれません。

資料館は、被爆の実相を伝えるとともに、広島



写真21（提供/鈴木恒昭）

の死者の記憶を伝える施設と言ってもいいと思います。実は、別名「記憶の博物館」とも呼ばれているのですが、その所以かもしれません。

最後に、被爆直後の広島と赤十字の関わりについてご紹介して、私のお話を終えたいと思います。

皆さんすでにご存知かもしれませんが、被爆の1か月後に、大量の医薬品を広島に届けた方がいらっしゃいます。当時赤十字国際委員会の駐日首席代表に着任したばかりのマルセル・ジュノー博士です。

広島では、毎年、博士の命日である6月16日前後に、資料館の真正面にある博士を記念する石碑の前で記念祭が行われます。

碑文には、次のような文章が刻んであります。碑文（英文併記）

「1945年8月9日、赤十字国際委員会の駐日首席代表として来日 広島^の原爆被災の惨状を聞くと直ちに占領軍総司令部へ行きヒロシマ救援を強く要請

9月8日調達した大量15屯の医薬品と共に廃墟の市街へ入り惨禍の実情を踏査 自らも被爆市民の治療にあたる

博士の尽力でもたらされた医薬品は市内各救護所へ配布

数知れぬ被爆者を救う 博士の人的行為に感謝し 国際赤十字のヒューマニズムを讃え永く記念してこれを建てる」

資料館では、当時の医薬品を保管し、館内に展示しています。提供された医薬品は「健康な人の血漿」など日本の医師が初めて手にする貴重なものでした。

博士は、自叙伝（『ドクター・ジュノーの戦い——エチオピアの毒ガスからヒロシマの原爆まで——』勁草書房）もお書きになっており、最後

の章は、広島の実験にあてられています。本の最後には、次のような文章が書かれています。博士はこのときすでに、資料館が建てられることを予見しておられたのではないかと、これを読んだときに思ってしまいました。

「崩れかかった駅の正面には、大時計の針が爆裂によって8時15分を示したまま止まっていた。

新時代の到来が時計の上に記録されたのは、人類史上これが初めてであった。

この証拠品を保存するのは、どの博物館であろうか………」

『ドクター・ジュノーの戦い』

勁草書房1981（原著1947）

長時間のご清聴ありがとうございます。